

動詞から見えてくる前置詞のすがた ——研究そして教学へ

干野 真一



A5判 248頁
好文出版
[本体3500円+税]

中西千香著
現代中国語における前置詞の
機能分化と動詞とのかわり

中西千香氏が院生時代から取り組まれている一連の前置詞研究の研究成果がこのたび上梓された。本書は前置詞研究のコア的要素が詰まった一冊であり、前置詞研究で取り上げるべき事がら、さらには教学面への応用まで多様な示唆を与えるものである。

典型的な前置詞構文「文型A: NP₁ + [P + NP₂] + VP + (NP₃)」について、序章で指摘がある通り、従来の研究ではP(前置詞)およびNP₂(前置詞目的語)のそれぞれの性質、さらにはPとNP₂により構成される前置詞フレーズについて着目したものが多かった。それに対し著者の主張は、VP(動詞フレーズ)部分、即ち動詞とさらには動詞を取り巻く付加成分をも射程としてこそ、前置詞への理解が深まり、延いては構文という視点で前置詞の文法的位置や機能を捉えるこ

とが出来るというものである。筆者も前置詞研究に取り組んでいるのでよく分かるが、動詞フレーズや構文という観点から前置詞を捉えることは、考察の対象を「足し算」ではなく「かけ算」で増やすようなもので、見るべき用例の分量や考察すべき点が大幅に膨れあがるのである。その大変な「仕事」を効率よく行っている点に本書の価値があると言える。

第一章では前置詞の定義がなされており、上述の典型的な前置詞構文を定めたのち、前置詞とは「後ろに名詞性成分(対象となるヒト、モノ、時間、場所、方向など)をともなつて、前置詞フレーズを形成する。通常その後ろには原則動詞フレーズがなければならぬ。前置詞は何らかの理由で動詞の直後におけないあるいはおかない名詞性成分を引き出すために用いる」と定義する。

そして、具体的な研究考察となる第二章では、まず前置詞自体の意味派生について論じている。これは動詞から前置詞にいたる変遷（いわゆる「文法化」）をあつかっている。一つ一つの前置詞にはそれぞれ前置詞として成立するまでの過程があり、その過程について、結びつくことが可能な動詞のタイプが拡大していく様子やその成立条件という点から詳細に考察している。とりあげられた前置詞は「対」と「跟」である。この二つの前置詞はいずれも動詞にその源を求めることができるが、本書を通じてその意味拡張の有り様を見れば、動詞から前置詞への文法化を考える上で最適なケーススタディであることがわかる。いずれも、豊富な例文をもとに考察が進められ、「後続の動詞の性質」や「対象がヒトかモノか場所か事柄かによってや対象の範囲が広いか狭いか」などが前置詞選択の鍵をにぎっているとした。同氏の研究は共時的研究ではありながら、同時に通時的な背景にも意識が向けられており、言語の変遷という流れの中で前置詞の意味拡張について考察が進められている。

続く第三章では、動詞の特徴という点から前置詞選択の要因をさぐる。動詞を相互動詞・伝達動詞・視覚動詞・ノンバーバル動詞・心理活動動詞および形容詞という、五つのグループに分けて考察を行っている。章中では一つの動詞に対して、

複数の類義の前置詞を用いることが出来る場合の各々の使い分けについても言及がある。例えば、*你 P 他* 解释。（あなたに彼に説明してください）という例文をもとに、P に入る可能性のある前置詞「跟、向、対、给」の四種について、以下のようにニュアンスの違いを考察している（八二頁）。

「跟」…発話者との発話の対象との上下関係をはっきりとさせない、ニュートラルな関係

「向」…発話者と発話の対象との関係は実際の上下関係が発話の対象をたてる関係

「対」…「+焦点化」または、発話の対象を引き出すための単方向的なもの

「给」…知識・情報の授与の対象をあらわし、恩恵を受ける者としての「他」を浮き立たせている

さらに、使用時の前提として「跟、向、対」は「疑問を持つ人に説明をする場合に用いる」のに対し、「给」では「理解に欠けて、わからない人、またはその情報を持たない人に説明をする場合に用いる」のであるという。類義関係にある前置詞群のニュアンスの違いについて、このように簡潔に示されているものは他書に例を見ない。

また、氏は本章で「跟、向、対、给」のそれぞれについて「イメージスキーマ」による図示を試みており、当該箇所の元と

なる論文の発表が二〇〇四年であることから考えると、中国語の記述において「イメージスキーマ」を取り入れたかなり早い時期のものであると言えよう。そして、これは現在でも大いに参考になるものである。考察・図示による簡潔な記載は教学面に資する点も多く、後述するとおり、これは氏の研究動機とも密接に関わっていると思われる。

そして第四章では、動詞の前後を含む動詞フレーズを手がかりとして、前置詞選択の契機をさぐっている。具体的な考察対象としては前置詞「対」と「把」の使い分けである。例として次のようなものがある(一一二頁)。

父母把他管得很严。(両親は彼を厳しくしつけた。)

平时妈妈对他管得很严。(ふだん母は彼に對するしつけが厳し。)

好文出版

新刊

中国語修辭学

王希傑著
修辭学研究會訳

A5判/五六六頁 本体五、八一〇円十税
中国における修辭学研究の第一人者である王希傑。その著作の中でも圧倒的なシェアを誇る『漢語修辭学』を翻訳。日本語での読者を想定し、引用文には日本語訳を付けた。また、巻末には日本語版独自の語句索引を載せた。
【ISBN978-4-87220-192-5】

現代中国語の移動を表す 述補構造に関する研究

A5判/本体四、〇〇〇円十税 島村典子 著

現代中国語における述補構造を体系的に理解。移動を表す述補構造の述語動詞が表す様々な意味に着目することにより、従来あまり取り上げられなかった言語現象を提示し、独自の見解を示した。
【ISBN978-4-87220-198-7】

現代中国語における前置詞の 機能分化と動詞とのかわり

A5判/本体三、五〇〇円十税 中西千香 著

前置詞の機能分化の過程を具体的に説明。前置詞と動詞とのかわりからその選択条件をみる。動詞に加え、動詞フレーズによる選択を検証。動詞からみた前置詞のコロケーションリストの附表掲載。
【ISBN978-4-87220-185-7】

著者はこの二つの例文に対し、前者は「対象への働きかけの結果までも感じられるもの」であり動詞フレーズは結果を表している。いっぽう、後者は「母親が彼に對してどのようなかという態度に重点があり」、「動作のあり方の描写や何らかの評価を述べている」というすみわけがあると考察している。つまり、動詞フレーズで述べられている内容に對する話者の意図が、前置詞選択に反映されているのである。

第五章では、それぞれの前置詞が用いられる文型のタイプなどの特徴から、前置詞の再分類を試みている。前置詞フレーズの文中における位置、否定副詞や助動詞との位置関係を考察し、さらに文頭に置かれた「対」来説「のような形式までを見る。これは「句式介詞」(筆者注:「前置詞」や「挟置詞」などと訳される、前置詞の「係り結び」の如きもの)と呼ばれ、

〒162-0041 東京都新宿区
早稲田鶴巻町 540 林ビル 3F
Tel.03-5273-2739 Fax.03-5273-2740
<http://www.kohbun.co.jp/>

近年、言語類型論や前置詞の通時的研究においてたびたび話題となつてゐるものである。そして、序章で述べられている前置詞を構文として捉えることにつながるもので、前置詞の機能化であり、「前置詞フリーズの中でも最も進化したもの」である。

本書における考察の中で、とりわけ目を引くのが「対」についてであり、これは氏が「(前略)前置詞「対」の動詞的な動きから文頭にまでくることができ、その機能の幅広さに魅かれて、修士論文のテーマとして選んだことからはじまった」と、あとがきにおいて述べられているとおり本書のきっかけであり、前置詞「対」とその関連表現について、というのが本書に一貫するテーマであると言えよう。「対」を論じる上で必要な類義表現・関連表現に言及していく中で、最終的に前置詞という文法カテゴリーの全体像までをカバーしているわけである。

そして、本書では以上のように前置詞研究のエッセンスが示された後、さらに附論、附表によって、本研究の教学面への応用の一端が示されている。著者の中国語教育分野における活躍については、ここで改めて述べるまでもないが、中西氏は研究の目的を「日本語母語話者ひいては中国語非母語話者が中国語学習をスムーズにできるよう手助けをするた

め」と述べている。この、常に学習者の視点に立った姿勢に、氏の研究の特徴が表れている。附論「3. 辞書にほしい情報とは」では「理想的な記述(筆者の提案例)」として、五つの常用動詞を例に、それぞれどのような前置詞情報が必要かについて著者の案が示されており、今後の「増補」が大いに楽しみである。また附表についても、いわば氏の学習成果を「一般公開」していただいているようなもので、示された動詞と前置詞のコロケーションは大変興味深い。今回収録された附表は動詞から引く例文集という体裁であるため、今後は、各前置詞自体のコアについて書かれたものも併せて必要となるだろう。本書の第二章で見たような各前置詞における意味拡張の全体像を併せて示すことで、より効果的になると考えられる。その点では、前置詞ごとの検討について「找」や「帮」など今後さらに多くのケーススタディを期待する次第である。

最後に、著者の研究姿勢のルーツと思われる部分について触れておく。本書では、類義表現のニュアンスの違い等について、インフォマントから得られた知見をまとめられた部分が多く見られる。これほど細かな違いまで、丁寧な答えられるインフォマントは、そうはいないであろうし、それが実現するのは氏の探求心による賜物であろう。詳細な記述からは、

氏がインフォマントに対して、くりかえし質問を重ねている様子が垣間見える。中西氏の研究の特徴は、常に教学面への応用または還元を意識したものであることである。あとがきからは同氏が好奇心旺盛な中国語学習者であることがよく分かります。氏の研究姿勢は中国語学習における探求心の延長にあると言える。本書は、著者が「缘分」を大切にされ、研究に勤しんでこられた真摯な姿勢があつてこそその成果であり、そして我々には、氏の研究成果を享受することが出来る「缘分」がある。

「前置詞というカテゴリーに入れられた一つ一つのものは、やはりバラエティに富んでいるとしか言いようがない」。本書で中西氏がこぼされているこの一言に、中国語の前置詞研究の難しさと面白さが詰まっているように思う。

(ほしの・しんいち 新潟大学)

中国語話者のための日本語教育研究会 第37回研究会

▼日時…11月12日(土) 13時～17時半(12半開場)

▼会場…首都大学東京 南大沢キャンパス 本部棟1階大会議室(京王線相模原線「南大沢」駅改札口徒歩約5分)

▼プログラム…中国語「既然」から見た日本語の論理体系(西畑美香)／中国人日本語学習者の対のある自我動

詞の使い分けについて―動作主の不注意による対象の変化を表す場合―(姚莎莎)／日中における「はめの返答」と「褒め手の印象度」についての比較研究(孟小溪)／

日本語のテ形に関する日中対照研究―中国語話者向けの日本教育文法の視点から―(村松由起子)／中国語話者の情報検索に見られる問題点―キーワード使用を中心に―(于凌越)／日中感謝表現の解釈フレームとコンテク

スト化の慣習―なぜ「このあいだはありがとう」が誤解の原因になるのか―(市原明日香)

▼申し込み不要・参加費無料

▼お問い合わせ…劉志偉 d182zhi@yahoo.co.jp

URL: <https://chungokugowashablog.wordpress.com/>